

タケダイチゴ、ななつぼしについて

2020.4.3. 竹田順一

前回のオーガニックNicoの研修会で、花芽の分化と花芽の摘果とイチゴの栄養状態について話がありましたが。皆さんがもう少し理解をしていただけるように少しまとめました。(たぶん勘違いしていることか多い)

オーガニックNico、ななつぼしII.2020.3.26.

有機JASの認証圃場ですから、科学的な農薬は使用していないが、同じ圃場でかおりの、ヨツボシの栽培をしているので、受粉用の蜂は入れている。(ななつぼしの単位結果性は、2017年の大阪府立大の植物工場の試験栽培で、よつぼしとの比較試験で確認済)下写真、ECが低いので花が小で花弁が5枚。



1. イチゴの花芽の分化

イチゴの花芽の分化は収穫の約2カ月前くらいです。その時に花房の花の数やイチゴの果実の大きさが決まります。果実を大きくする基本は摘花ではない、花芽の分化の時の雌しべの数です(雌しべ一つ一つがイチゴの種になる)。下の写真の「二芽摘花あり」比較しても果実の大きさはほとんど変わらない、同じ果房の摘花によって同じ果房の果実を大きくすることはできない。

摘花は2カ月前の花芽の分化のためである。高知、熊本、阿蘇での栽培試験で、摘花しなくても2L以上が80%以上の結果から、株の栄養状態(EC)をコントロールすることで、花芽の分化の時に雌しべの数を増やす。ななつぼしは品特性としても花芽分化が多いのでECを高くする。(ECを0.7くらい)

オーガニックNico、ななつぼしII、花芽を二芽摘花したもの



ななつぼしII、花芽を二芽摘花したもの



2017年、果房の花芽の状態、熊本



イチゴの花の受粉と花びらの数 2017、熊本



イチゴの花が開いたとき、雄しべには受粉機能(花粉を飛ばす)はない、雄しべの受粉機能は花が開いて1~2日後です。逆に雌しべは花が開く2日前から受性機能がある。ななつぼしは花弁が多い時は一番外の花弁が開いたとき雄しべが受粉機能(花粉を飛ばす)がある。

イチゴの果実を大きくする基本は摘花ではない、花芽の分化の時の雌しべ(種)の数です(雌しべ一つ一つがイチゴの種になる、下の写真)、雌しべの数は花芽の分化するとき、約2ヶ月前に決まる。そのためにはイチゴの栄養状態をコントロールすることが重要です、その目安は花弁の枚数と花の大きさから判断できるが、イチゴの花びらの枚数は5枚が基本ですが、ななつぼしは株の栄養状態が良い時は花びらの枚数が多くなる。しかし逆に、株の栄養状態が過剰な時は奇形果実や先白果、先緑果が発生する。

株の栄養状態の良いななつぼしの花、真ん中のトゲトゲのようなものが雌しべ、花弁が大きく多いと、花弁が雌しべと雄しべを包むようになるので、花粉が花弁に包まれた中で飛び、受精する。



下の写真、ななつぼしイチゴの栄養状態の悪い株の花、雄しべに比例して雌しべの数が少ないし、花弁にも隙間がある。写真左
雌しべが受粉しないとき、瘦果実(受粉できなかった種が成長できない) 写真右



栄養状態が過剰な時の奇形果実(左)や先白果、先緑果(右)

